

子宮がん検診（施設）

動 向

平成19年度における子宮がん施設検診受診者は、頸がん17,557名（前年度比2,695名増）、体がん1,555名（前年度比66名減）で、受診者総数は前年より増加した。また、受診者の年代では、40歳から50歳代が9,033名で51.4%となる。受診者の大半は、健康保険組合の保健事業として総合健診や人間ドックと併用している方々で任意型検診である。

当協会の子宮がん検診は、婦人科専門医による問診と内診、コルポスコブ検査、細胞診検査である。

子宮頸がんの発生は若年齢化が進んでいる。その背景には「初交年齢の低下」が重要なファクターとしてある。40歳代以降の継続的受診はもちろん大切であるが、若い世代（19年度20歳代受診者数1,086名6.19%）の方々にも検診を受診していただきたい。

子宮がんは早期発見・早期治療が重要であり初期段階では自覚症状のない場合が多いため、定期的に健康診断を受診することが重要だと考えられます。

結 果

2007年度の子宮頸がん検診受診者数は17,557名である。年齢階級別受診率は、50歳代が最も多く（27.5%）、次いで40歳代（23.9%）、30歳代（20.8%）の順であり、頸がん、異形成発見率の高い29歳以下の受診率は極めて低い（6.1%）。初診の割合は前年度より高く（42.7%）、年齢階級別では、29歳以下が最も高く（85%）、次いで30歳代（68%）と若年層に高く、加齢に伴って低下しています。子宮頸部細胞診の要精検率0.69%、要再検率0.86%、両者合わせた要再精検率は1.55%である。再精検受診者数179名（受診率65.6%、8月30日現在）から、頸がん9例（0期6例、I a期1例、か期1例、病期不詳1例）と異形成71例（軽度56例、中等度6例、高度8例）が検出されました。

頸がん発見率は0.05%、初診に高く（0.08%）、年齢階級別では、30歳代が高く（0.16%）、40歳代の順である。頸がん9例中、早期がん（0期6例、I a期1例）が7例（78%）と高率に検出された事は、早期診断、早期治療に向けて、当該症例の方々が多

大な貢献をしたこととなり、当協会子宮がん検診の絶大なる効果である。

異形成発見率は0.40%、初診に高く（0.63%）、年齢階級別では、29歳以下が著明に高く（0.64%）、次いで30歳代（0.30%）と若年層に高く、加齢に伴って低下しています。

検出された頸がん、異形成両者は頸部細胞診クラス別検出感度は（病変有無追跡確定率56%、8月30日現在）は、クラスⅡ再検31%、Ⅲa、76%、Ⅲb、100%、Ⅳ、100%、Ⅴ、100%と適正でありました。

以上の結果から、子宮頸がん検診受診率の低い若年層（29歳以下6.18%、30歳代20.8%）に、頸がん、異形成の検出率が極めて高いことが明確にされました。今後、検診を実施する側、検診を受ける側両者が、上記の点に注目して、若年層受診率向上に向けた方策または仕組みをつくりあげる努力と実行が必要欠くべからざる課題となった。

子宮体がん検診

子宮体がん検診受診者数は1,555名で、頸がん受診者数の8.85%である。吸引チューブが挿入できず、経膈超音波による内膜厚測定に変更した症例（細胞採取不能例）47名を除いては、増測式呼吸法による内膜細胞診を実施した。内膜細胞診の結果、要再検例5例、要精検9例（疑陽性6例、陽性3例）が指示された。本年度は、体がん3例、内膜増殖症3例が検出されました。

卵巣がん検診

一次検診で内診結果、異常を触知された方、または希望者に対し経膈超音波法、腫瘍マーカーを併用した卵巣クリニックを開設しています。本年度の受診者数は213名から、卵巣がん0例、卵巣のう腫8例（3.75%）が検出されました。

関係の集計表は85頁に掲載